新規採用教員へのインタビュー

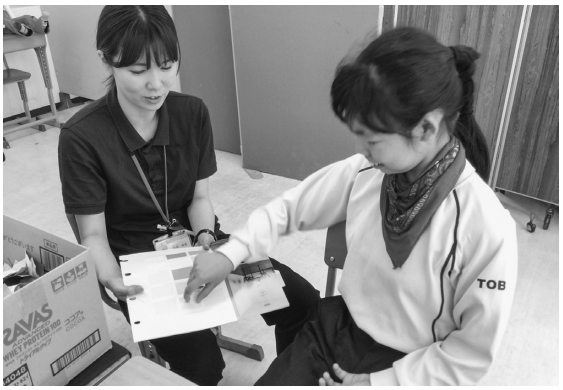
弘中　希依 ひろなか　きえ
県立東備支援学校　教諭
（令和６年度採用）

自己紹介

特別支援学校教諭として令和６年度に採用されました。
県立東備支援学校には、知的障害のある児童生徒が通っており、初年度と今年度ともに、高等部２年生の担任をしています。

Q 教員を目指した理由を教えてください。

元々、子どもが好きだったので、子どもと関わる仕事がしたいなと思っていたのですが、中学校1年生の時の担任の先生と出会って、「こんな人になりたい」と強く思ったことがきっかけです。その先生は、厳しいけれど頭ごなしに否定することはなく、優しいけれど甘やかすわけでもない。そんな絶妙なバランスを持っていて、人間性に憧れていました。その先生のような大人になりたくて、同じ道を歩もうと教員を目指すようになりました。



校内実習の様子

Q 特別支援学校の教員を目指した理由を教えてください。

実は、大学では中学と高校の保健体育の免許しか取得しておらず、大学在学中から令和5年度の教員採用試験までは、ずっと高校の保健体育で出願していました。憧れていた先生が保健体育の先生であったこと、また幼い頃から水泳を続けていて、運動が好きだったため保健体育の先生を目指していました。高校を選んだのは、高校生活が本当に楽しかったからです。体育祭などの行事はもちろん、通学や授業、休み時間など、仲の良い友人に囲まれて毎日が楽しかったです。

その後、実際に高校で講師等として勤務する中で、自分は特別支援学校の教員が向いているのではないかと思うようになりました。令和6年度の教員採用試験では特別支援学校に出願し、採用いただくことができました。

Q 講師等の経験について教えてください。

県外の大学に進学し、大学卒業後も県外の高校で非常勤講師と生徒寮の舎監として勤務しながら、採用試験の勉強を続けました。

夕方までは非常勤講師として勤務し、夕方から生徒寮の舎監として勤務していました。その寮は県外から部活動のために集まってきた生徒たちが暮らす場所で、私は主に管理面での業務に携わったのですが、生徒との交流がとても楽しかったことを覚えています。

4年で生徒寮の舎監が任期満了となったので、岡山の実家に帰ることにしました。中高時代を過ごした岡山の方が暮らしやすいと思ったことも理由の一つです。友人の多くは県外に出ていますが、友人が岡山に帰ってきた時に会うことができるので、嬉しく思っています。

岡山に帰ってからは、定時制の倉敷市立玉島高校で常勤講師等として約3年間、勤務しました。担当したクラスの生徒は10人ほどで進学する子は少なく、「卒業してから、いかに健康で長く働くか」ということに重きを置いた授業を行いました。「テストのための保健体育ではなく、生涯にわたって健康に過ごすための保健体育」という視点を意識して授業をする中で、「こんなことを伝えたい」「こんな力を身に付けてほしい」「こんなリアクションが生徒から返ってきてほしい」と、保健体育を教えることのやりがいや大切さを再発見することができました。それまで、保健体育の先生は生徒指導や学校行事を先頭で引っ張る存在というイメージが自分の中にあり、「自分には教員は向いていないのかもしれない」

「ずっと講師のままでいた方が良いのかもしれない」という気持ちが強くありました。しかし、倉敷市立玉島高校での勤務を通して、教員の仕事の魅力を改めて感じることができました。

倉敷市立玉島高校に3年勤務したタイミングで、特別支援学校での勤務の声掛けをいただきました。

特別支援に関する専門的な知識がなく迷ったのですが、当時の校長先生に「向いているかもよ」と言っていただいたことが後押しになりました。同僚の先生に「細かいところに気付くことができている」と褒めていただいたこともあり、そういったところから「向いている」と言っていただいたのだと思っています。日頃から生徒の表情や姿勢、目が合う回数など、ちょっとした様子に気を配るようにしていました。

特別支援学校は複数の教員で担任をするのですが、勤務する中で、その体制がすごく自分に合っていると感じました。そこで特別支援学校での勤務2年目に認定講習を受けて、特別支援学校の免許状を取得しました。勤務3年目の時にはじめて特別支援学校教員に出願し、新採用となることができました。高校の保健体育に出願していた時は、「自分には向いていないのではないか」という気持ちを抱きながら受験していましたが、特別支援学校教員受験時は、「特別支援学校の教員になりたい」と心から思うことができていて、その気持ちを面接官の方にも説得力をもって伝えられたことが大きかったと思っています。

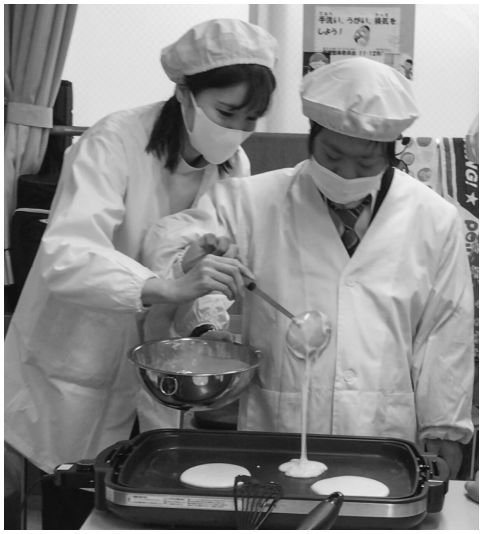
美術の授業で自画像を制作する様子

Q 仕事の中で、どのようなことに気を付けていますか。

一つは、先生方とのコミュニケーションです。

現在、知的障害のある高等部2年生を担任していますが、生徒は、自身の行動の理由を言葉で説明できないことも多くあります。そこで、1年生のときから生徒と関わっている先生方に「今日こういうことがありました」と共有したり、一緒に「この行動にはこういう背景があるのかもしれない」と探ったりしています。「事前にこういうことを伝えておくと良いよ」と具体的な手立てを教えていただくこともあり、自分の実践に取り入れるようにしています。障害を持っている生徒たちは、日常生活の中で何かしらのしんどさを抱えています。そのしんどさを少しでも軽くできるように、「この時間、自分には何ができるだろう」と常に考えるようにしています。

また、保護者の方から教えていただく姿勢も大事にしています。保護者の方が何気なく話される過去の出来事が、生徒の今の行動につながっていることがあります。保護者の方とお話しする時間を大事にしています。


調理実習の様子

Q 最後に、是非伝えたいことはありますか。

今では、新採用となる前に講師等を経験することができて良かったと思っています。講師経験があっても初任者というのを強みにして、周りの先生にたくさん相談に乗っていただいています。

「何歳になっても、児童生徒と同じ目線に立って一緒に歩んでいける先生」を目指して、これからも頑張っていきたいです。